

冬の富士

早村 春鶴

暫くはただ眺めたき冬の富士
写真撮ることさへ忘れ冬の富士
ひとり旅なぐさめくれし冬の富士
童謡の書展の中にも冬の富士
朔風さくふうにさからひ歩く人寡黙かもく

お正月

一谷 春窓

和服着て迎ふる子等の初御空みそら
買い初めや娘の書きくれしメモ用意
駅弁とつまみ買ひけり旅はじめ
いっぺんに孫帰りけりお元日
はつきりと書く句読点初日記

河豚

東 素子

括られし残菊けれんみもなきや
赤や白椿の散りかた悪からず
河豚湯引き舌になじみし盃重ね
熱燗をこのみし夫の友や逝く
はやぶさ2冬の宇宙に夢を乗せ

林檎むく

武部 春浦

極月の新聞を読む暇もなく
「無」を問いつ赤き林檎の皮をむく
深々と朝日を包む冬の雲
親猪に寄り添うて子のしつぽ振り
空おおう鶴の渡るを見しという

冬帽

白原 博泉

冬紅葉険しき坂に差しかかる
冬虹の架かる箕面の滝麗たけつらら
笹鳴きや棚田に人の影動く
さざんかや金剛山に咲き乱れ
冬帽を深く被りて家を出る

银杏散る

山本 春英

この橋の左右は他の街年の市
ブランコの父に银杏ふりしきる
犬の友集いしところ银杏散る
塾生の自転車並らび冬の雨
誘われて银杏落ち葉を父と踏み

神の庭

久保 春玉

氏神に合掌冬日呼んで来し
聞きかえすマスクの中のくり言よ
ストープに煮つめし話豆を煮る
雨男と行く墓参り年の暮
ドングリが芽を出して苑うらかに

凧

井上 元良

干柿にはや味見する鳥からすの在り
足音に鯉も泳ぎ来冬日向
金剛山はや初冠雪のお披露目と
凧てふ一夜で変わる雑木山
報恩講にわか信徒になりしかな

柚子湯

山岡 扶佐

書き籠あひる間の柚子湯を楽しめる
柚子入れて眠け覚まし湯にひたる
暖冬のドングリの芽吹く社かな
ドングリの発芽のみどり鮮かに
留守居して一人すき焼きこれもよし

岡内 ちやまみ

よさこいの祭稽古のアーケード
落暉より湧き出るやうに秋茜
締め忘れし窓にすがしき今朝の秋
亡き夫の満面の笑み焼き秋刀魚
里帰りまだ木犀はかたくなに

「涛光」(二〇一五・澄冬号)より

初詣 早村 春鶴

平日の如く元日目覚めをり
平成も昭和も共に初詣
人波に流され拝殿初詣
暗闇の拝殿おごそか初詣
福引きの鉦鳴り響く初戎

新年 小島 小汀

新年の句作に心弾みおり
春めける日ざしを抱きて遠散歩
芽柳に一筋の川流れけり
新年にまだ二句足りぬ小汀句 春洋
二上より葛城寄りに初日の出 春洋

年の暮 佐藤 雲溪

行く年や昭和を語る老二人
今昔も火の用心で年暮る、
窓の外馴れし木の葉と冬の月
友一人二人と逝きて年暮れし
背おいたる持病と寿命年暮る、

弾き初め 一谷 春窓

弾き初めや孫の娘と重ねみる
寒厨箏の音聞きつ餅を焼く
陽光を真向かいにして初写真
川波の光り散らして夫婦鴨
手庇の欲しき陽差しや梅探る

お屠蘇 東 素子

年用意名前書き終え箸袋
年新た程よき酒を酌みかわし
定番の大盛り皿に年始め
数の子を食すリズムや屠蘇祝い
世の流れ恐怖増しおり年新た

去年今年 武部 春浦

行く場なく窓にさまよう冬の蠅
背伸びして振り返りつ、帰省客
この道をどこまで行くや冬日差し
年越しのコインランドリー回りをり
初漁や闇に音曳く網を引く

松の内 白原 博泉

初電車混み合ふ神戸三の宮
三日晴旗ひるがえる通過駅
六十路ゆく手を温めて筆始
太箸を置きて楽しむオセロかな
住み慣れし蕪村の街や冬鷗

冬薔薇 山本 春英

我家にも一りん咲きて冬薔薇
千両の実も葉も色も深きかな
どこまでもみち一すじの初灯り
鉄塔で何を思うや寒がらす
愛猫の鳴き声耳に暮急ぐ

ひとり粥 久保 春玉

ため息が多き一日息白し
今年こそ無事息災と初日記
おめでとう声なき声の初メール
独り居に慣れて七草ひとり粥
入試願いの絵馬カラカラと初詣

初日の出 井上 元良

午前五時御慶交はしつ闇路行く
初日の出見え隠れなる景色かな
樹氷林朝日を受けて赤く染む
健と福求めくり出す初詣
書初や心ゆくまで筆の舞ふ

お正月 山岡 扶佐

初詣社の裏へまわりけり
父母も来て豆乳鍋の二日かな
遅れ来て酒ばかり飲む鍋料理
遅れ者御慶申して鍋の席
満月に誘われ道を迷いしか

山菜莢の花

早村 春鶴

心地よき光を浴びて春の街

地下出口銀座の街へ春の人

富士山頂雲の流れて春立ちぬ

立春の富士は雲中雨模様

山菜莢の花咲く銀座文春展

新年

一谷 春窓

初雪の深き轍や遠嶺晴

食卓を文机にして雪籠

掌にのせて切る絹豆腐寒厨

切り株に下ろせし腰や梅探る

訪えば叔母流感の玉子酒

立春

東 素子

立春の水のしみ込み顔洗ふ

ほの見えし花卉の白き春立てる

床に散る髪に白髪よ春立てる

立春の肌さす風や春立ちぬ

遠く影富士の暮れゆき春立てる

雪の天草

武部 春浦

わが庭の玻璃戸越しなる雪明かり

ふわりふわり天草全土雪綿布団

軒の雪バサリと落ちて日の暮れし

豪雪や野良の命を隠しつつ

雪だるま老いたる身には雪兎

※玻璃戸||ガラス戸

風見鶏

白原 博泉

冴え返る空青々と風見鶏

春浅し仕事帰りの路地いくつ

立春の声の飛び交ふ校舎かな

水玉の傘の模様や春浅し

マニキュアを塗りて六十路の寒明ける

早春

山本 春英

早春のみゆき通りの街暮る、

風花の街を静かに走る市内バス

風花や喜び走る孫を追う

熱爛に白魚更に所望せり

春寒し負傷の癒ぬ子の仕草

小春日

久保 春玉

一枚も取れず子泣けりカルタとり

恵方より福が飛び込む丸かじり

豆播きの豆浮いている洗濯機

独り居の豆播き鬼も福も内

目つむれば心はいつも小春日に

初雪

井上 元良

初雪や白き庭園悲鳴あぐ

みかんとて雪の帽子が良く似合う

初雪や山河はどこも綺羅きらと

雪道を主人ゆるゆる犬はしゃぐ

初雪や飛礫とびかう登校生

春の闇

山岡 扶佐

夕焼けの移ろふ雲と枯木立

春節の里山影絵の国となり

返事する猫の尾っぽや春の宵

猫走るもぐらを追ふて春の闇

梅白し猫七匹の姦しく

遷座祭 早村 春鶴

夕東風に幡はためいて遷座祭

如月の社灯の消え遷座の儀

三月の空へ宮司の神を呼ぶ

如月の闇中杵の音響く

濡れしま、不動の衛士春の雨

※遷座祭とは 檀原神宮の御神体は、皇室の初代天皇の神武天皇です。今年に崩御されてから、二六〇〇年になります。記念祭(四月三日)の一環で、本殿修理のため仮拝殿に祭られていた御神体を本殿に移す祭典です。三月の八・九日に渡って挙行されました。

白梅 一谷 春窓

白梅の雨音もなし旅に出る

武田家の秘め事湖の夕桜

初蝶の視界を離れた戻る

神ならば叶えられたし春の夢

頬杖のままにうたた寝春の雪

うぐいす 東 素子

清明や初音いよいよ心映へ

暖かき朝に誘われホーホケキヨ

たまさかに朝の初音を聴きをりし

鶯の声も姿も耳朶にあり

鶯の初音スマホに収めけり

梅の雨 武部 春浦

梅の雨通夜の灯りに街の灯に

海峡を越えて飛び往く梅の花

春嵐や風鳴り雨の走り来る

松島は道路工事の年度末

タンポポの道の停車場バスの客

春の蚊 白原 博泉

春の蚊を窓に遊ばせかかわらず

ひらひらと空に遊びし花辛夷

山深き家育ちかと梅を観る

枝折れしつぼみの桜瓶に挿す

如月やジブリのバズル完成す

春講座 山本 春英

たんぼぼの鉢一ぱいに葉を上げ

来客のミモザの花の一握り

脱ぎ捨てしパジャマの重し春の朝

列長く帰雁の群の続きけり

闘病の師のおだやかに春講座

春寒し 久保 春玉

春寒し庭に忘れし花鉢

春浅し風の中なる風信帖

事多き人の恋しき猫柳

言えばただ「色即是空」春の雨

猫好きの友の絵手紙春便り

春がきた 井上 元良

さきがけて群れて咲きをり犬ふぐり

日差しへと苞持たげをる露の臺

クロッカス黄金眩しく咲き揃ふ

か細きも心踊りし初音かな

甕に入る桃香ほんのり庭明り

誕生日 山岡 扶佐

如月のおぼろ月夜の誕生日

水仙の背筋のぼして蕾三つ

水仙の香りたたえて庭の宵

待ちわびる絵手紙弥生の花咲かせ

絵手紙の一句が春をつれて来し

茶の湯 岡内 ちやまみ

初春の琴の音流る茶の湯かな

屠蘇に酔いマイク離さぬ人ばかり

遅しき成人の子の祝い膳

実南天庭に鳥来し昼下り

百歳の友の逝きたる五日かな

春句会

泉 雪華

さびしさをまぎらす一人の春句会
十ばかり詠みて一人の春句会
春夕ベワインで乾盃して別れ
春の陽のあたれる側を歩みをり
名も知らぬ鳥の声聞く春の庭

夕 桜

早村 春鶴

満開の老桜一本無人駅
老夫婦花を求めて京の旅
太閤の花見もかくや人の浪
バス中の人皆無口花疲れ
ぼんぼりの灯を待ちわびし夕桜

仏生会

一谷 春窓

經典の背表紙赤し仏生会
彼岸会や夫の癖字のラブレター
夫からの文読む娘等や春彼岸
頼杖の外れて目覚め春の昼
山桜ひとひら句碑の文字の中

さくら

東 素子

地球は星宇宙に浮きし桜咲く
美し星大和の国に桜愛で
風通り舞い散る庭の花明り
花見酒ゆるりと時を愉しまむ
花一輪文に添えられたることうれし

春の雨

武部 春浦

白骨のさららと崩れ春の雨
春の海焔めく果てに帆影見ゆ
雲に乗り旅をしつらむ春の月
春灯や演歌ちらほら流れ出づ
魚跳ねて闇の濃くなりし春の夜

たんぽぽ

白原 博泉

土手に咲くたんぽぽの絮整ひぬ
陽紅は川添ひに咲き雨模様
桜湯や今日まで生きてこれからも
又ひとつ袋集めぬ春の昼
茅花咲き母の命日近づきぬ

春講座

山本 春英

張りのある師の声聞きつ春講座
揺れもせず真すぐ立つや竹の秋
若芝に白きボールのはずみゆく
春風に大筆少し開きけり
捨てがたきミモザの花や色深く

花見頃

久保 春玉

彼岸きし話はいつも父母のこと
花冷えや花木蓮の動かざる
一句まとまりがたく木瓜の花
病床に弟見舞ふ花見頃
病弟に花の見頃を問われけり

さくら

井上 元良

黒髪に花屑かけ合ふ女学生
花飾り頭につけてとお茶目な子
親花見子らは遊戯となりけり
花篝鮮やかに揺れ妖しけり
閉じること知らぬ性あり花の満つ

春光

山岡 扶佐

酒がまんして送りけり春の月
春光にニヨキと新芽チューリップ
山笑う葛城山麓花の頃
初物の筍と露の味と香と
寝入りたる大葛城を背に花

花雪洞

岡内 ちやまみ

春立ちて寺に羅漢の笑顔かな
月冴ゆるふいに路地より救急車
花雪洞は等間隔よ松の蔭
駆け込みのセールの列や四温晴
風そよぐ岡豊城址の若葉かな

※「陽紅は…」ヨウコウという名の桜

立夏 早村 春鶴

日も風も川の流れも夏に入る
緑増す樹々それぞれに夏に入る
蒼穹を田ごとに映し夏に入る
雲が来て雲が流れて鯉幟
風止んで空に大口鯉幟

ひとり 小島 小汀

学園の若葉の道をひとり来し
萬緑の遠き山脈ひきよせる
むらさきの色に魅かれて更衣
しばらくは狭庭の若葉眺めけり
母の日の日射しを浴びしカーネーション

御柱 一谷 春窓

春深し木落とし坂に涌く悲鳴
悲鳴から変はる歓声御柱祭
青葉風もんどりうって巨木落つ
筍の煮物に箸の賑やかし
雀の子寒の戻りに戸惑へる

八重の藤 東 素子

手児奈廟池に写して八重の藤
八重咲きの紫深き藤の波
たもとほる池の藤棚芯隠し
甘き香に蜂寄りいし八重の藤
羽音して蜂の遊べる八重の藤

地震 武部 春浦

地震 武部 春浦
余震切れず平常心の白牡丹
息止めて地震の揺れかと春嵐
走りつつ猫の名を呼ぶ地震かな
余震あと蛙鳴く道帰りけり
海と空分かつ灯並ぶ春の闇

蜘蛛の子 白原 博泉

蜘蛛の子の走りとばして見失なふ
薔薇崩る一瞬を我見逃さず
頑張れと父の口癖著我の花
テールを丸型に替へ薄暑かな
足はねる雲梯の子や合歓の花

祖母の日 山本 春英

春愁や紛失物の多ければ
母の日の孫がくれたるカーネーション
チューリップにかけかえられし歯科医院
師のありてこそその新緑我ここに
師を囲む新緑展に参じけり

藤の雨 久保 春玉

猫が好き一人が好きで春惜しむ
小社の朝の静けさ藤の雨
お見舞いのえんどう御飯炊きてをり
もてなしの小鉢いっぱい夏蕨
母の忌やあじさい壺に溢れしめ

初夏の東土野をゆく 井上 元良

水神に手向ける如く懸り藤
寺茶垣新芽出揃い摘みを待つ
萩若葉夢ふくらませ揺れてをり
蕨採る老の二人や血眼に
春風を吸い込み干せる和紙の里

白雲先生お慕参り 山岡 扶佐

大つぶのえんどう飯に食すすむ
新緑はモクモク躍動空碧し
盛り上がる地球の息吹き新緑風
薫風や師の案内板に語り行く
薫風や白雲夫妻山に座す

梅雨 早村 春鶴

風止んで雨音ばかり男梅雨
降り出せば三日続きの男梅雨
菜園の水やり惑わず梅雨曇り
眼と耳で河鹿の姿さがしをり
尺蠖しやうかくの葉のなき枝になりすます

初蝶 小島 小汀

初蝶の影追ひしこと狭庭なり
ベランダに出て遠山の春がすみ
水流れ早苗の茎に力あり
待ちかねて梅雨の青空見えてきし
日に酔ひて散歩のあゆみ早くなり

白牡丹 一谷 春窓

己が身に棲みたる苦楽青田風
夜に閉じる力持てぬし白牡丹
衿足をすつと触れゆき恋螢
シヨウウィンドウ色鮮やかに夏めける
玉砂利の萬の響きや菖蒲園

舟遊び 東 素子

垂れ籠めし重き空気の梅雨に入る
焼き蚕豆綿かとうまわらひの甘さの鮮やかに
房総の枇杷深々と酸味秘め
実生枇杷空を掴みて育まれ
船名見せ隅田の夜の船遊び

風薫る 武部 春浦

五月雨や瓦礫続きの街静か
薫風やビルの谷間の散歩道
梅雨前の緊急作業排水溝
青空を狭めて樹々の青葉時
風薫る樹々の輝きこの庭に

夏蝶 白原 博泉

ころころと転がる蜘蛛や音もなく
店先の朝顔の笛蕾つけ
夏蝶や此処より先は工事中
何もかも父親譲り花菖蒲
十葉はふるさとに咲き干されをり

更衣 山本 春英

身を縮め舗道に往生大蚯蚓
太目の子更衣して軽やかに
夏座敷法事の客の会釈かな
夏蝶の羽根ゆるやかに舞い下りぬ
師の姿夏木の如く甦れ

時鳥 久保 春玉

昨日より出来ぬ事増え更衣
終わりはならぬ御身や時鳥

田植 井上 元良

温室に育ちの勢い早苗箱
代を掻く土の具合いやふた廻り
早苗田の畦に懐かし豆育て
田植機を降りて一息媪の茶
早苗田のほど良き匂ひ包む里

小春日 岡内 ちやまみ

牧場の柵にもたるる秋桜
浴室の小窓に望む居待月
戯れに鈴を忘れし木の実独楽
赤べらの歌に聞き入る菊日和
紅葉山噴火の名残り留めをり

四月に詠む 春洋 句

百歳を果たし昇天春の月
相継いで先輩他界朧月
鉄線の花の咲き継ぐ誕生日
一列に並びて開花君子蘭
撈らぬ仕事に花の雨らしく

恩地先生を悼む 早村 春鶴

薫風も訃報の後は寂しくて
相継いで我が師昇天螢飛ぶ
十葉の花咲き乱る師の訃報
水無月の夜の雨音師の訃報
夏雲のかげら浮かべて師の逝きて

師を偲んで 一谷 春窓

遠青嶺雨の来たりて師を想う
燈涼し師には届かぬ俳句かな
句を詠めば亡き師偲べり夏今宵
鐘聲や慈雨光りる濃紫陽花
夜半の夏師の昇天を諾へず

春洋先生逝く 東 素子

六月の余韻全き句の縁
初夏の句を送り春洋先生逝き
添削なく重たき無情はたがみ
句集発刊所望せしま、螢ぶね
人の世は虚しさ満てり木下闇

梅雨明 武部 春浦

さわさわと音する沢の梅雨の入り
梅雨寒の一日になりぬ師の訃報
梅雨明の袋小路や雨の中
窓閉めて開けてまた閉め梅雨最中
初蟬の微笑かに鳴きて耳すます

青葉の如く 山本 春英

引越しを友へ知らずも梅雨最中
梅雨最中語らう老女傘も杖
物言わぬ師の生きざまや夏霞
師のことば「青葉の如く生きられよ」
七夕やも一度親子会わせたし

春洋先生の死を悼む 井上 元良

日々渾身尽きぬ命は木下闇
惜しみなき書の道極む梅雨最中
梅雨深し師の慈しみ忘るまじ
師の訃報万縁黒み強めたる
哀悼の心ひときは黒南風に

水無月 山岡 扶佐

短夜や小声の教へ止めどなく
短夜や微笑み浮かべ講義終ふ
碧天の遠きふるさと風涼し
水無月に待ち人來たり旅立ちぬ
水無月に生きざま見せて笑みて逝く

星月夜 早村 春鶴

会議終ふ帰路満天の星月夜

洗ひつゝ師の名見つけし硯裏

寝静まる鑑艇黒き星月夜

鯛の声遠ざかり日の暮るゝ

小気味よき小兵力士の勝ち相模

稲妻 一谷 春窓

稲妻や玻璃に残りし子の指紋

雷雨の遠くなり子等眠り初む

読経やゆらぐ流灯湖の風

帰省子を見送りし後の仕舞風呂

秋愁ふもはや師の目に届かぬ句

空蟬 東 素子

七年の目覚めの歓喜蟬時雨

空蟬の脚のくい入る葉先揺れ

抜け穴は憂さを呑みこむ法師蟬

打ち揃い夏日背にして庭手入れ

ぎらぎらと夏日まといし子らの行く

かき氷 武部 春浦

やせ猫の黒き影立つ夏の月

かき氷胃の腑に涼の落ちてゆく

連なりて揺れる提灯夜店かな

ティータイム蟬もの憂げに鳴き初む

朝夕の蟬噪減りて子等の声

日焼 山本 春英

師の書作暑さの京の毎日展

師の訃報友に伝へて夏の雨

我が腕の日焼の皴のやわらかき

聞き飽きし太き歌声夏休み

艶やかな空蟬土にころがりて

蟬 井上 元良

熊蟬の軽やか響き威厳あり

蟬時雨ラジオ体操軽やかに

蛸の今日惜しむかに暮れにけり

初法師勢いの声を溢れさせ

鳴きおへて腹見せ動かぬ蟬骸

立秋 山岡 扶佐

喜雨のあり故郷の経を頂戴す

日盛りや買物通り我一人

天空の花火麗しはかなくも

炎天や鷺はゆたりと足換える

見慣れたる筆跡なぞるや秋立ちぬ

春隣 岡内 ちやまみ

冬晴や旅情を癒す天守閣

料亭の昼餉の膳に梅一枝

日溜まりに踊る手編の毛糸玉

山茶花の散りて狭庭を暗くせり

師を尋ねそこは冬日の屋敷跡

初月夜

早村 春鶴

名月の山端離れて村照らす
山裾の我が家を照らす月遅し
竹林のゆれ動く中初月夜
風吹きて光波打つ花芒
如露の水かかり蟪蛄身構へる

赤とんぼ

一谷 春窓

道すがら桔梗摘み足し夫の墓
濡れ縁に吹き込む雨や花芒
こぼれ萩ここより人家途絶へけり
空碧し翅の秀きたる赤とんぼ
赤とんぼ子のまな差しを逃れ飛ぶ

秋蜻蛉

東 素子

平穩にアキアカネ飛ぶアキツ島
根を張りし秋草始末仲間笑顔
草山を築き散会秋日落つ
豊醇な市川梨の恵み食ふ
祈りのみ人智及ばぬ台風禍

秋の空

武部 春浦

蝉噪の日本列島のみ込む日
夏翳り瘦せ猫の目はらんらんと
一夜明け回り舞台か秋の空
仏舍利塔沈む晩夏の夕闇暮れ
目に見えぬ痛み走りて秋の蚊に

さわやか

山本 春英

「成長」と名付けてはげむ運動会
運動会稽古の怒号まだやまず
台風組体操もひと休み
さわやかにマイクに通る朝の声
秋暑し真白き献花師と別る

虫の音

井上 元良

虫の音や澄みしソプラノ堂々と
虫の声生命ふるわせ奏でけり
演奏は三重奏とも虫楽団
虫の音に今宵も癒さる思いかな
チンチンとりズム大好き鉦叩き

月

山岡 扶佐

月今宵四囲おだやか光満つ
鶏頭の一系列畑に整然と
朝露やチヨウゲンボウ見つけたり
乱れなき雁の渡りや竿になり
迷走の台風いずこ探しもの

春隣

岡内ちやまみ

戻り寒熾火に炭を足しながら
寒鴉落暉に解ける長堤
新しき障子に子等の豆の音
石坂へ杖持ち替える春隣
ほんぼりに浮かぶ夜桜散り初むる

秋野 早村 春鶴

休耕田皆秋野なり過疎の村
朝寒や身支度手早く旅支度
椋鳥の群を吸ひたる並木道
権の美を拾ふ子供等ちりぢりに
干からびてなほ逃れんと鴟の贄

紅葉 一谷 春窓

秋霖や声使ふこと無きひと日
山背風紅葉の紡ぐ音色して
空仰ぐ足もと紅葉且つ落葉
中腹に虹立つ秋の八ヶ岳
孫等呼ぶ声間に合はず秋の虹

鴟 東 素子

街の端のフィールド緑鴟の啼く
鴟の声湾処の空の不響和音
空睨む無念のありや鴟の贄
雄を食ふ蟪蛄の目に時宿る
共食ひの猛る姿の雌蟪蛄

秋灯 武部 春浦

秋灯や記憶の底の二燭光
秋灯の影に闇あり子の涙
雲ちぎれ消えゆく彼方天高し
カニ渡る水の溜りに秋の空
行き止まり秋月影を戻る道

運動会 山本 春英

運動会応援大鼓天を打つ
運動会止まぬ拍手の組体操
「技」終えて安堵の笑顔運動会
みな無事に帰るを祈る渡り鳥
太目の子吾子探している運動会

秋晴れ 山岡 扶佐

秋晴れに部屋の片付けせかさる、
秋晴れや物干し狭し洗い物
褒められてまた句を作る秋晴れて
そゞろ寒うがいにわかにはじめたる
瑠璃色をまとひし鳥や秋の川

秋 井上 元良

筆跡に生気脈々書の秋
墨痕に書き心沸く芸の秋
白菊に埋る遺影の笑み消えず
天高く大和三山悠然と
秋あかね草原悠悠々遊びをり

秋の声 東原 春城

書の前の子童胆秋の野の風情
秋深し師の作品に黒リボン
古き友書展の出合い秋の声
十月の台風古民家雨の帯
秋の声聞くふりをする高校生

木の葉雨 早村 春鶴

木の葉雨あびて袖^{そで}径^{みち}ましら追ふ

落葉^{らくえつ}径^{みち}音を^{こゝろ}楽しみ一人^{ひとり}行く

一夜^{いちや}明け裏山^{うらやま}透^{とほ}けし神渡

午後^{ごご}になり冬の^{ふゆ}日^ひざしにもどり来て

立話^{たちわ}農婦^{のうふ}等八十路^{はちじゅう}小六月

西の市 一谷 春窓

言葉直ぐ出ぬこの頃^{ころ}や木の葉^は髪

膝^{ひざ}に乗る猫^{ねこ}に重^{おも}みや初^{はつ}炬燵

ひとところ天地^{てんち}を繋^{つな}ぐ村時^{むらとき}雨

気^きぜわしき江戸^{えど}の名^な残^{のこ}りの西^{にし}の市

西^{にし}の市^し足元^{あしもと}ばかり見て歩く

初冬 東 素子

赤煉瓦^{せつれんわ}倉庫^{くらぐら}に墨^{すみ}の香^か冬^{ふゆ}に入る

木の床^{ここのとこ}に初冬^{はつふゆ}の靴音^{くつね}出^で合^あひ生^なむ

冬日^{ふゆのひ}和墨^{わすみ}線^{せん}誇^ほる五十五人

前衛書^{ぜんゑいしょ}大ポスター^{だいぽすとあー}映^{うつ}へ冬^{ふゆ}の町

冬^{ふゆ}ぬくし再び^{ふたたび}集^{あつ}ふ心秘^{こころひ}す

冬日和 武部 春浦

木^き枯^かの唸^{うなり}りて吠^わえて波^{なみ}踊^{おど}る

新嘗^{しんじやう}祭^{まつり}老後^{らうご}の一大^{いちだ}行事^{こうじ}とし

祭人^{まつりびと}わらわら集^{あつ}ふ箕^み祭^{まつり}に

冬日^{ふゆのひ}和若^{わじやく}き和尚^{おしょう}の高^{たか}き声

古稀^{こき}近^{ちか}し残^{のこ}すを^を選^{えら}ぶ小六月

初時雨 山本 春英

乘^{のり}り遅^{おそ}れ我^{われ}ひとり立^たつ初^{はつ}時^{とき}雨

冬^{ふゆ}耕^かや小^こさき背^せ中^{ちゆう}の老^{らう}農^{のう}婦

冬^{ふゆ}めきて厚^{あつ}手^てのパジ^ぱヤ^やマ^ま孫^{まご}に^に着^きせ

ダイエ^{だいえ}ット^{っと}するもど^{もど}りし亥^{がい}の子^こ餅

行^い秋^{あき}やなわとび大^{だい}会^{かい}は^はじまりぬ

深秋^{ふかあき}の高野山^{たかのやま}詣^{よみ} 井上 元良

葉^はの艶^{あつ}と鮮^{あざ}やか黄^{わう}金^{きん}菊^{きく}門^{かど}前

薄^{うす}明^{あきら}かり白^{しろ}菊^{きく}凜^{りん}と極^{ごく}めを^をり

護^ご摩^まを^を焚^{たき}く煙^{えん}棚^{たな}引^ひく惜^{おぼ}しむ秋

川^{かわ}底^{そこ}を^を染^ぞめ入^いる紅^{べに}葉^はは^はじけを^をり

せせらぎに紅^{べに}葉^は黄^{わう}葉^はの錦^{にしん}織

小六月 山岡 扶佐

カレンダ^かーの揺^ゆれ軽^{かろ}やかに小六月

神^{かみ}の留^{とど}守^もされど祈^{いの}りの神^{かみ}の庭

櫓^か田^{でん}や茅^か葺^づ屋^や根^ねの一^{いっ}軒^{けん}家

神^{かみ}渡^{わた}し山^{やま}の端^は一^{いっ}瞬^{まじ}と見^みせ給^{たま}ふ

雲^{くも}湧^わきて稜^{りやう}線^{せん}隠^{かく}す朝^{あさ}時^{とき}雨

櫓田^か || 刈^{かり}り入^いれの^の後^のの^の稲^い株^くから、新^{あたら}しい
芽^めが^が出^でて短^{みじ}い穂^ほが^がつ^ついた^た田^のの^のこ

立冬 東原 春城

スリッパ^{すり}の中^{ちゆう}も老^{らう}体^{たい}冬^{ふゆ}立^たちぬ

一^{いっ}人居^にの部^ぶ屋^やのぞ^ぞかる、冬^{ふゆ}の月

足^{あし}早^{はや}を^を引^ひきかへしたる石^い露^ろの花

膝^{ひざ}病^{びやう}んで冬^{ふゆ}の旅^{りょ}路^ろは地^ち図^ずの上

園^{えん}庭^{てい}に園^{えん}児^には^はじけて木^きの葉^は雨